

して、著者は漢代の十二章を續漢書輿服志に見るが如き日・月・星辰・山・龍・華蟲・藻・火・粉・米・黼・黻であつたことを確信されてゐる。そしてその具體的形象が一々與へられ、元來日月星辰は天子の標識であり、山龍華蟲は繪畫的圖象であり、藻火粉米黼黻は刺繡的圖象であることが述べられてゐる。最後に新彊省樓蘭と外蒙古ノイン・ウラ出土の遺品の圖紋が神仙思想を反映したものであることが述べられてゐる。

第二章は祭服で漢代には冕冠・長冠・委貌冠・皮弁冠・爵弁・建華冠・方山冠・巧士冠の八種があつたがその形態が一々その細部まで考察されてゐる。六朝には漢制が大體踏襲されたが後周にいたり従來の單一性が破られ諸種の區別が生ずるにいたつた。尙女子の祭服も併せ述べられてゐる。

第三章は服服であるが漢代には通天冠・遠遊冠・高山冠・進賢冠・法冠・武冠・卻非冠・却敵冠・樊噲冠・荀氏冠の十種があり六朝にいたつてもその大體は踏襲された。六朝にいたり前代に比して特異なものは袴褶の制で、これは胡服の影響であつて北朝の人は殊に愛用したものであつた。

第四章は服飾雜として頭髮・巾幘及帽・帶・綬・鞞・笏・佩刀・釧・履及靴が取扱はれてゐる。以上内容の梗概を略述したが本書は實に著者の周到綿密なる詮索考證の一大成果である。著者が文獻を自由に涉獵驅使せるは勿論であるが、更に漢代の資料としてはノイン・ウラ、樓蘭或ひは樂浪の古墳出土品をはじめとして畫象石・畫象磚が、六朝のものとしては傳顧愷之筆女史箴圖卷や雲崗・

龍門或ひは天龍山・響堂山の石窟の人物畫象やその他明器等の遺物が取扱はれてゐることは吾々の興味を惹く所である。人或ひは著者の遺物取扱ひの方法に對してあきたらずとするかも知れない。然し著者のかゝる態度も亦是認されて一つの高峯を示して居り、そのことは本書が又直接最近出土の服飾關係の遺物の闡明理解に大いなる寄與をなすことと併せて推賞すべき事と思ふ。(四六倍版、東洋文庫刊行、定價七圓)(澄田正一)

### 古代北方系文物の研究

梅原末治著

古代北方系文物、所謂スキタイ文物に關する探査研究が、東西文化交渉史上の一課題として過去一世紀以來、内・外東洋學者並に考古學者の間に、異常の關心を高めつつあることは周知の事實であらう。

本書はこの方面に對し多年撻まざる努力を以て攷究を續けてゐられる著者が、嘗て滯歐中親炙し、直接指導をうけられたケンブリッジ大學の碩學ミンス教授の華甲頌壽の意を含め、大體昭和三年以降最近に至るまでの間諸種の學術雜誌或は記念論文集等に公表紹介せられた北方系文化に關する論考を一應集成すべく、全面的に新資料の増補、見解の修正を加へて出刊されたもので、次の諸論著(八篇)と外に外國論文の好適なもの四篇の譯出が附載されてゐる。

#### 第一、北蒙古發見の漢代の漆器

第二、米國フリア美術館所藏の象嵌狩獵文銅洗

第三、考古學上より觀たる漢代文物の西漸

第四、北支那發見の一種の銅容器とその性質

第五、古代朝鮮に於ける北方系文物の痕迹

第六、最近出現の鞘のある北方系銅劍

第七、漢代の植物文様に就いて

第八、アルタイ地方に於ける考古學上の發見

附錄

第一、ミスシンスタ地方に於ける古代金屬文化の種別化試論

(テプロウホフ)

第二、東部アルタイに於けるスキタイの埋葬(R・S)

第三、南西伯利亞オグラクテイの漢代墳墓(タールグレン)

第四、北蒙古ノイン・ウラの遺跡(カズロフ)

本文八篇は大體昭和三年以來の執筆年次順に従つて配列されてゐるやうであるが、全篇を通觀するに相對應する二類、即ちイラン系文物の東方への影響を語らんとするものと、及び他の分野たる支那の文物西漸の究明を意圖するものとに大別される。前者に屬するものは第四・第五・第六・第七等にして、後者に入るべきは、第一・第二・第三であり、殊にこの三篇は西歐の學者が自國文物を偏重視するの餘り、専らイラン系文物の東漸を強調せんとして、往々正しい判斷を失せんとする傾向あるを難し、支那漢代文物の西方への影響をより高く評價すべきを敢然力説せんとしたる劃期的な試みであり、これは樂浪出土の遺物や支那本土の遺品

を精査知悉せる著者にして始めて克くなしうるものと謂ふべく、その整然さは全書到る所惜しみなき圖版の挿入(一〇九圖)と共に讀者の理解を一層容易ならしめてゐる。確かに本書こそ、未だこの種專著を有しないわが國讀者の翹望を充分滿して餘りあるであらう。

今ここでは紙數の關係上これら一一をとりあげることは許されないが故に、唯興味深く感じられる第八「アルタイ地方に於ける考古學上の發見」の概要紹介のみに止めたい。本篇はアルタイ地方の出土品がスキタイ系文物に關する研究熱蔚興のそもその先鞭をつけたものとも考へられる點から、この地方に於ける考古學上の發見の歴史を簡述した後、著者が三度に互る人露によつてグリアスノフ氏等の發掘當事者より直接目觀耳聞しえた所により同地方のシベ及びベズイルタ古墳の構造遺品を報告し、併せて兩遺跡の年代測を致へて、前者を漢代盛時、後者をそれより古い時代のものとして推測したもので、かの國學界の狀態について全く知らない現在としては最貴重なものであらう。特にその積石塚中に完存せる被葬者によつて知られる古代この地方に於ける死者埋葬の風習及び副葬品(馬具、漆器、刀子、玉飾、骨製器具等)に沈彫されたる唐草文様が、ギリシヤ風の忍冬文との或る種の關係あるを窺はしめること、更にバズイルタ古墳中に馬具類と共存した土器片が、燒成その他に於て小壺倫・赤峰等出土の史前土器に酷似することなどを、多數の圖版を掲げて注意してゐるが、これらは何れも頗る示唆的なものとして興味を湧き立たしめる。

以上本書各篇を通覽するに、歐亞大陸の北方帯に於ける所謂スキタイ系統の馬具・銅劍・銅鞘・銅容蓋その他の金具類等の遺物を通じて、西方文物の東漸、乃至は該地帯から出土した支那漢代の絹布・漆器・鏡鑑・玉璽等の遺品により漢代文物の西漸が巧みな手際によつて系統的に證示されて居り、敢て考古學者のみならず廣く東洋史一般に關心を有するもの必讀を望む次第である。就中、ややもすれば文獻のみに提はれ勝ちな吾々は、この書によつて、文獻的記載が如何に特殊なものであるか、そしてこの特殊の背後に在る一般性普遍性が如何に注意すべきか、從つて特殊のもつ普遍、一の含む多を常に考慮に入れつつ文獻的史料は取扱はるべきかを今更の如く痛感せしめられるであらう。(昭和十三年六月、星野書店發行、菊版二九八頁、挿圖一〇九、價六・〇〇圓)〔田村實造〕

稻葉博士滿鮮史論叢  
還曆記念

稻葉博士還曆記念會編

本書は文學博士君山稻葉岩吉氏が昨年を以て還曆の齡に達せられたに際し、博士の知友、後進諸士が、博士の滿鮮史學界に於ける功績を記念し以て慶頌の意を表せんがために編纂刊行した一大論文集である。載録せるもの二十五篇の多きに上り、概ね朝鮮及び滿洲の文化研究に關するもので、いかにも斯界の先達の頌詩を飾るにふさはしい。まづ、卷頭に收録した稻葉博士の「予が滿鮮史研究過程」と題する一篇は、博士の年譜の用をなすとともに、

又日露戰役前後より漸く開拓の機運に惠れた我が滿鮮史學界の一回顧録でもあつて、興趣深く讀者に呼びかける。以下掲載の諸論文を紙幅の許す限りに於て紹介を試みよう。

「高句麗の蓋牟城に就て」(關田一龜)は唐太宗高句麗征伐軍の攻陷した蓋牟城の位置は、賈耽道里記によると遼陽より撫順に至る道順にあることが推定せられ、又唐書韋挺傳によれば、これが新城(近年撫順城背後の小城址がそれに當るとせられてゐる)と隣接してゐたことが知り得るといふ理由で、その地を撫順千金寨西方古城子の土城(今は露天堀の區域内に入る)に擬定し、奉天遼陽の中間十里河邊に比定せんとする松井等氏の説(滿洲歴史地理二)を訂正したもの、近年發見せられた新城遺蹟の位置と韋挺傳の記事とを活用して立論したのは本篇の強味である。

「金の曷蘇館路と寧州」(島田好)は、朱希祖「鴨江行部志地理考」「金曷蘇館考」の所説に反對し、金は國初遼の舊に仍つて曷蘇館路を建て、都統を置いたが、天會七年寧州に徙治し、天德三年都統を節度使に改め、明昌四年遂に之を廢して辰州(今の蓋牟)に編入したと説き、寧州の位置を鴨行部志等によつて今日の蓋、復二縣の境界線をなす浮渡河の上流なる龍口河と蓋復街道との交叉點附近にして河の北岸であると考定してゐる。「金初の子重に就て」(三上次男)は、金の建國以前女眞諸部は數多の大部族に分れ、更にそれが數部乃至數十部の小部に分れてゐた。その小部の長が子重であつて、部民に對して行政權・司法權及び兵權等を有してその職は世襲であつた。建國後金室が新機構猛安謀克制を定めて後、